

言語研究の底を流れる思想を考える 推論様式を手掛かりとして

その他のタイトル	On the Western Metaphysical Tradition Underlying Major Linguistic Theories: Some Remarks with Special Reference to Several Modes of Inference
著者	山本 英一
雑誌名	関西大学外国語教育研究
巻	16
ページ	47-61
発行年	2008-10
URL	http://hdl.handle.net/10112/2534

言語研究の底を流れる思想を考える

— 推論様式を手掛かりとして — *

***On the Western Metaphysical Tradition Underlying
Major Linguistic Theories:
Some Remarks with Special Reference to Several Modes of Inference***

山本 英一
YAMAMOTO Eiichi

Prevailing linguistic theories, whether they are of syntax or of pragmatics, are loaded with ideas that often leave Japanese linguists perplexed and alienated. At the root of these ideas is a Western metaphysical tradition that dates back to Plato and Aristotle, according to which divine reality is considered to exist beyond the reach of our sensory perception. Thus, physical objects and physical events are just “shadows”, both temporary and inconsequential, of their ideal or perfect forms, which are inaccessible to those that use only their senses. Since Japanese linguists, however, tend indeed to believe in things that they can perceive with their five senses, to them such trust in divine reality is incomprehensible.

Awareness of this ideal or perfect existence is claimed to be universal, and achieved through rationality. This belief often leads major Western linguists to assume that human beings are entirely rational and reliably efficient creatures, and blithely to ignore all irrational and inefficient aspects to their communicative behavior. Focusing on several modes of inference that seem relevant to pragmatics, this paper suggests that attention should be given to non-monotonic reasoning (i.e., a method of inference that allows the production of more than one interpretation of an utterance), the idea of which is both non-rational and also perfectly palatable to Japanese linguists, whose thinking is quite independent of the Western metaphysical tradition referred to above.

Keywords: inference, non-monotonic reasoning, rationality, efficiency, metaphysics

1 はじめに

長らく言語研究にかかわっていると、さまざまな議論の中で、ごく当たり前のように示されている考え方に、何かしっくりしないものを時折感じることがある。そのとき厄介なのは、その当たり前に挑戦したいのだが、そのことをあえて口にしようものなら、たちまち議論の土俵から放り出されはしまいか、というジレンマに陥ることである。この当たり前 (= 大前提) を妄信的に受け入れなければ、言語研究の世界では門前払いを喰わされることになる。すこし穿った見方をするならば、その世界の一員となるためには、(言葉は悪いが) 鵜呑みにしなければならない思想が巧みに学問の中に仕込まれていると言って良いのかも知れない。

思えば現代言語学隆盛の祖ともいえるチョムスキーが、デカルトを引用し、ポートロワイヤル文法に言及したのも、彼がそれを正当化する思想的背景を背負った学者であることの証左に他ならない。ごく初期の生成文法では、文法的に適格な文を生み出すために、さまざまな変形規則が考案され、その適用順序が問題にされるなど、きわめて具体的かつ明快な議論が展開された。私たち日本人の研究者にとっても魅力的な理論であった。変形規則を学習文法に応用しようという大胆な試みまで出現したのもその頃である。ところが、人間の脳の中に生得的に埋め込まれた文法の解明が究極の目標となり、そのためにI-言語やE-言語の話が出てくるあたりから雲行きは怪しくなる。後に述べる理由で日本人にとっては受入れがたい(はずの)主張が濃厚になっていくのである。議論は抽象化の一途を辿り、理論の枠組みが次々に変化するごととも相俟って、傍目にはチョムスキーが迷走を始めたように映った。しかし、デカルトやポートロワイヤル文法への言及と同じく、この受入れがたい主張にも、また抽象化にも思想的必然性があった。迷走どころか、いわば確信犯的にチョムスキーは、みずからが拠って立つ思想がめざす理想を追い求めたのである。

その思想とは、プラトン、アリストテレスにまで遡るギリシャ哲学であり、その後2000年以上の長きにわたって西欧を支配してきた世界観なのである。残念ながら、私たち日本人はそのような思想を共有しない。「何かしっくりしないもの」、場合によっては「いかがわしいもの」さえ感じるのは、私たちの世界観が西欧のそれとあまりに異なるからである。そういった異質な思想・世界観に基づく学問的枠組み(言語研究もそのひとつ)の中で何の違和感もなく仕事ができるのは、①単に無知なのか、②その事実を知りながらそれはそれと割り切っているのか、③西欧で生まれ育ったなどの理由で同一の価値観を身につけているか、そのいずれかである。常識的に考えて③の事例は稀であろう¹⁾。問題なのは、以下の議論から明らかになるように、「实在」、「精神」、「自然」などの用語が、日本人が心に描く日常的な意味とは著しく異なっているために、本当に事の本質が理解できているかどうかはわかりにくい点である。表面的な字義だけで了解した気になっているケース(=①)と、はっきり理解した上で議論を展開しているケース(=②)との区別が難しい。特に懸念されるのは①の場合である。そこでは、西

欧の人々と日本人が同じ土俵の上で議論を戦わせているように見えて、実際にはまったく異なる言語観、そして世界観にしたがって主張を続けていることになる。何となくしっくりこない思いは、言語が異なるのと同じように、私たち各自が拠って立つ思想が大きく違っていることに起因している。本論では、意味を扱う議論に繰り返し出てくる推論様式を手掛かりに、私たちの背景となる思想とは異なるにもかかわらず、いつの間にか私たちが与えられている西欧思想について考えることにしたい。

2 意味の研究と推論

2.1 関連性理論と演繹法

発話の意味を文脈の中で特定する語用論においては、スパーバーとウィルソンが提唱する関連性理論 (Relevance Theory) が研究者の注目を集めている。そこでは、発話の解釈が聞き手に要求する負担度 (労力) と、発話が伝える情報量 (報酬) を天秤にかける。話し手は、なるべく少ない労力でより多くの報酬が得られる発話を意図していると考えるのである。

- (1) $\text{Relevance (関連性)} = \text{Effect (報酬)} / \text{Cost (労力)}$

したがって、たとえば、次のような対話において、

- (2) a. How far is Nottingham from London?
b. 120 miles.
c. 118 miles.

(Wilson & Sperber 1991:143-44)

問われた2都市間の距離を答えるには、区切りのよい数値を与える (2b) と、正確な数値を与える (2c) のような2つの選択肢が考えられる。グライス流の「過不足なく情報を与えよ」というルールに従うと (2c) が望ましい答えとなる。一方、仮に時速60マイルで車を運転したとき、ロンドンからノッティンガムまでどれほどの時間がかかるか知りたい人への答えとしては、(2b) の方が適切である。得られる情報がほぼ同じだとすれば、先程の関連性の数式 $R = \text{Effect} / \text{Cost}$ にしたがって、割り算のしやすい、ということは、解釈にかかる労力が少なくてすむ「120マイル」に軍配があがるからである。関連性理論が考えるコミュニケーションのポイントは、効率のよいメッセージ伝達ということになる。

さて、その関連性の理論では、次のような推論様式が重要視される。

- (3) a. If Socrates is a man, he is mortal. (ソクラテスが人間ならば、彼は死ぬ)
b. Socrates is a man. (ソクラテスは人間である)
c. Therefore, Socrates is mortal. (ゆえに、ソクラテスは死ぬ)

(Levinson 1983:114)

まず前提1 ($H \rightarrow C$) があり、そこに前提2 (H) を合わせることによって結論 (C) を導き出す「演繹法」(Deduction) である。たとえば、次の対話では、

- (4) a. Does Susan drink whisky?
b. No, she doesn't.
c. She doesn't drink alcohol.

「スーザンはウイスキーを飲まない」というメッセージを伝えたいわけで、ストレートに (4b) と言えばよい。しかし、(4c) で答えることも可能で、その場合、次のような形で演繹法 (演繹的推論) が用いられる。

- (5) 前提1: もし Xがアルコールならば、スーザンはXを飲まない ($H \rightarrow C$)
前提2: ウイスキー (X) はアルコールである (H)
結論: スーザンはウイスキーを飲まない (C)

関連性理論によると、演繹的推論が作動する発話解釈を通じては、以下に示すようなさまざまな (言外の) 意味が伝わるという。

- (6) a. ウイスキー [シェリー、ジン、ビール等] はアルコールである。
b. スーザンはウイスキー [シェリー、ジン、ビール等] を飲まない
(以上、強い推意)
c. スーザンはソフトドリンクの方が好きかも知れない
d. (酒を飲まない) スーザンはおそらく酔っ払いが嫌いだろう
e. スーザンは二日酔いの経験がない、等々
(以上、弱い推意)

(Wilson & Sperber 1986:55-6)

(6a) は (5) に示した演繹的推論が成立するための前提であり、(6b) はそこから導き出される結論である。これらは「強い推意」と呼ばれる。それに対して (6c-e) は、付随的に伝わるメッセージで、他にも話し手と聞き手が共有する知識に応じてさまざまなバリエーションが無限に考えられる。これらは「弱い推意」と呼ばれている。発話 (4c) を選択した場合、ストレートな (4b) では得られなかった弱い推意、言い換えると付加的情報が相手に伝わるのである。つまり少ない労力でより多くの報酬がもたらされる点が、間接的な受け答えの存在理由と考えるわけである。演繹的推論を介して効率のよいメッセージ伝達のモデルを提示するのが関連性理論の真髄といえる。

言語表現を文脈の中に定位してその意味を考えようという語用論の世界にあって、果たしてそのような考え方を貫き通せるのか、という疑問が湧き起こるが、それはひとまずおいて、以下では演繹法以外の推論様式を考えることにしたい。

2.2 帰納法

演繹法に対して、帰納法 (帰納的推論) は事象を観察し、その中に発見される個別・特殊的事実の多さから結論を導き出す推論形式である。

(7) あるグループから抽出したサンプルの幾つかには属性Aがある

結論：サンプルの属するグループ全体に属性Aがある

たとえば、次のように証拠を積重ねて、一つの判断をくだす場合が、これに該当する。

(8) a. I have dug up 1001 carrots. (人参を1001本掘り出した)

b. Every one of the 1001 carrots is orange. (1001本の人参はすべて赤色だ)

c. Therefore, all carrots are orange. (ゆえに、人参はすべて赤色だ)

(Levinson 1983:114)

当然のことながら、帰納的推論による結論は、事実に照らし合わせて「確からしい」とは言えても、必ず真とは限らない。上の例でいうと、1002本目に掘り出した人参については、何らかの理由で赤色でないかも知れない。

(9) The 1002nd carrot is green. (1002本目の人参は緑色だ)。

演繹法では前提 (e.g., 3a) が正しければ、正しい結論が導き出されるが、このように帰納法においては、前提 (e.g., 8a,b) が正しくても結論の正しさは保証されない。このことが、帰納的推論の欠点であると同時に、後から述べるように、言語研究を含めて、本論が問題とする西欧の学問の底を流れる思想とも相容れない部分なのである。

2.3 アブダクション

この推論様式では、ある意外な事実 (前提1) (C) が観察されたとき、「もしHが真であれば、Cは当然の帰結であろう」(前提2) (H→C) と考え、「(おそらく) Hであろう」との結論を引き出す (米盛 2007:62-63)。たとえば、

(10) a. This carrot is orange. (この人参は赤色だ) (C)

b. All the carrots in this bag are orange. (この袋の人参はみんな赤色だ) (H→C)

c. Therefore, this carrot is from this bag. (ゆえに、この人参はこの袋のものだ) (H)

赤色の人参を見つけ (C)、同時に手許にある袋の人参は赤色だ (H [Xが手元の袋に入っている] → C [Xは赤色だ]) と言えるとき、それを根拠に、この人参はこの袋に入っていた (H) のだろうと判断するような場合が、この推論様式に該当する。演繹法 (前提1 : H→C、前提2 : H、∴ C) に似ているが、先件 (H) と後件 (C) の扱いが入れ替わっている (前提1 : C、前提2 : H→C、∴ H) ため、論理的には誤った推論である。たとえば、上の (10) のケースでは、たまたま手許の袋に入った人参が赤いだけで、この人参の出所は別の袋 (入れ物) であったかも知れない。アブダクションも、先ほどの帰納法と同様に、結論の正しさは保証されていないのである²⁾。

2.4 デフォルト推論

次のような推論様式も存在する。

- (11) a. Something was a bird. (α) (あるものは鳥であった)
 b. A bird flies. (β) (鳥は空を飛ぶ)
 c. Therefore, the thing flies. (したがってあるものは飛ぶ)

これを一般化すると、

- (12) もし α が真であり、 β が私たちの知識と整合するならば、 β が真であると想定せよ。

$$\frac{\alpha : M \beta}{\beta}$$

(Ginsberg 1987:7-8)

例として、(11) の推論様式をもう少し具体化してみよう。「トイティは鳥だ」(α) と教えられたとする。「鳥が空を飛ぶ」(β) ということは、私たちの知識 (データベース) と矛盾しない ($M\beta$)。したがって、「トイティは空を飛ぶのだ」と私は考えても差し支えないのである。

この結論は多くの場合正しいが、たとえば後からトイティがペンギンだと分かった時点で破棄しなければならない。このように、例外であることが指摘される (= 断り書きの存在が判明する) までは有効な推論のことを、デフォルト推論 (default inference) と呼ぶ。ペンギン (であるがゆえに飛ばない) と判明したトイティの例からもわかるように、デフォルト推論もまた、先に述べた帰納法やアブダクションと同じく、その結論の正しさは保証されていないのである。

2.5 不確かな推論群とコミュニケーション

前提さえ正しければ、真の結論がただ一つ導き出される演繹的推論に対して、帰納的推論、アブダクション、そしてデフォルト推論では、引き出される結論の正しさが保証されない³⁾。帰納法を「演繹法ではないもの」と広義に解釈するならば、アブダクションもデフォルト推論も帰納法の一つと位置づけられる。それらの特性は真であることの保証がない、言い換えれば必然性がない点である。

言語分析の立場から眺めると、それぞれ途中のプロセスは異なるものの、推論を通して帰納的に得られる結論は「推意」(implicature) と呼ばれる言外の意味にあたる。その特性は (発話の直後に) 取消することができること (defeasibility) である。事例で考えてみよう。それぞれの推論プロセスを経たと仮定される以下の結論 (13a-c) は、(14a-c) の発話により直ちにキャンセルすることができる⁴⁾。

- (13) a. All carrots are orange. (帰納的推論)
 b. This carrot is from this bag. (アブダクション)
 c. Twitty flies. (デフォルト推論)
- (14) a. That's not true! This one is green. (それは違う! こっちは青い)
 b. I'm afraid not. This carrot is from that bag. (いや、この人参はあっちの袋だ)
 c. That's strange! Twitty is a penguin. (おかしいな、トイティはペンギンなのに)

このように、真であることが保証されないという論理的特性は、取消し可能性という言語的特性として現れると見ることができる。

コミュニケーションとは、帰納法、アブダクション、デフォルト推論、すなわち帰納法的推論により導き出される、いつでも取消され得るという意味において不安定ではあるが、特別な事情がない限り取り立てて言及する必要がないという意味において暗黙のメッセージ（言外の意味、推意）の上に成り立っていると考えてもよい。次のレビンソンの指摘は、そのあたりの事情を簡潔にまとめている。

- (15) コミュニケーションにおける約束事は、そうでないと述べられるまでは事態が従来どおり推移しているという前提に依存している

(Levinson 2000:48)

推論を介して伝わるメッセージの、暗黙の、かつ不安定な局面が、時として話し手と聞き手の間に誤解を生むのだと考えられる。コミュニケーションが失敗に終わることがままあることを知っている私たちは、言葉が誘発する帰納的推論の不安定さを、失敗の理由（の少なくとも一つ）として言語理論の中に担保しておく必要があるのである。

2.6 強固な演繹的推論

それにひきかえ、同じ推論でも、演繹的推論はそのような不安定さを許さない。前提が健全であれば、結論は常に真でなければならないのである。たとえば、

- (3) a. If Socrates is a man, he is mortal. (ソクラテスが人間ならば、彼は死ぬ)
b. Socrates is a man. (ソクラテスは人間である)
c. Therefore, Socrates is mortal. (ゆえに、彼は死ぬ)

(3c) に続けて、「しかし、幸い彼は不死身だとわかった」(But it turned out that he was immortal) とは絶対に言えない。論理矛盾をきたすからである。

関連性理論で好んで使われる例を考えてみよう。

- (16) a. Are you going to the talk this afternoon? (今日の講演会聞きに行くかい?)
b. It's on pragmatics. (語用論の講演会だよ)

(16b) の発話は何を伝えようとしているのか。演繹的推論を使うと、次のような説明になる。

- (17) 前提1：もし講演会が好きなテーマでないならば (X)、その人は講演会にはいかないだろう (Y)

前提2：講演会は好きなテーマでない (X)

結論：その人 (=私) は講演会へは行かない (Y)

先の (5) の例が、(6) のような推意群をもたらしたように、たとえば (17) からは以下のような強い推意とともに弱い推意が誘発される。

- (18) a. 私は語用論が嫌いだ ([前提2として入力])

- b. 私は語用論の講演会には行かない [結論]

(以上、強い推意)

- c. 統語論を押さえていなければ語用論の話は無駄である

- e. 語用論者はみんな頭がおかしい、等々

(以上、弱い推意)

ここで、「私は語用論の講演会には行かない」という結論は、推論にもとづいてはいるが、これを取消す(つまり、「でも、私は語用論の講演会に行く」と付け足す)ことはできない。推論は推論でも、演繹的推論だからである。取消しは論理矛盾を意味する。

それにしても、(4) や (16) の例では、そもそも No と言えば済むところである。関連性理論で説明されるように、演繹的推論により(したがって定義上)唯一の正しい結論を誘導し、豊かな推意(弱い推意群)を効率よく伝達するために、発話がなされているのだろうか? 何か重大な見落としがありはしまいか。

たとえば、闇の組織の親分と子分の間でかわされる次の対話を考えてみよう。

- (19) a. Can he be trusted? (彼は信頼できるのか?)

- b. He's on the payroll for fifteen years and his wife is proving rather expensive.

(15年働いていますし、嫁さんは結構金遣いが荒いですから)

—J. Archer, *Honour among Thieves*

ある意味歯切れの悪い(19b)の背後には、ストレートにYesと答えることによって「彼は信頼できる」という命題(信念)にコミットしたくない、という発話者の意図が見え隠れしている。後で彼が裏切ったとき、「あのとき信頼できると言ったではないか」と親分に詰問されても、「そんなことを言った覚えはない」と言える口実を担保しておきたいのだ。そのために「Xだから」と言うにとどめて、「(だから) Y」については聞き手の解釈に委ねているのである。

確かに、真面目な勤務態度とお金が必要な家庭状況から経験的に推測すると、彼が裏切ることとはなく、という解釈はおおた妥当ではある。しかし逆に、15年しか働いていないし金銭的にもルーズな家庭状況から経験的に推測すると、彼は当てにならない、という解釈の可能性も残されている。いわば帰納法的推論が、言い換えると結論が一つに絞られない推論が誘発されるからこそ発話者にとっては意味があるのだ。この場面では、演繹的に、ゆえに唯一的に導き出される結論を相互に了解するようではいけない。「そんなことを言った覚えはない」と言って話し手が逃げおせない、のっぴきならぬ状況が用意されてしまうからである。

このように、場面や文脈の中で同定される発話の意味は、そこに関わる話し手と聞き手の人間関係、たとえば(19)の例では親分・子分の上下関係から紡ぎ出されるものである。そのように考えると、(19)と事情は異なるが、(4c)や(16b)の発話も、まずは人間関係を出発点に考えるべきではないか。たとえば話し手と聞き手が親しい間柄の対話であると考え、「彼女が基本的にアルコールを飲まないこと(X)」や「私の嫌いな語用論の講演会であること(X)」

を忘れている相手に対する当て擦りかも知れない。

その上で、(Xから) Y (すなわち、「ウイスキーを飲まない」「講演会に行かない」) を推論するのは聞き手の裁量に委ねられる。おそらく、その結論は経験上妥当性の高いものには違いないだろう。しかし、話し手がYを断定していない以上、例外的にスーザンがウイスキーを飲む可能性、あるいは私が翻意して講演に出かける可能性は残されている。いや、この不確定性は残されていなければおかしい。もし演繹的に唯一の結論が引き出され、「例外」の可能性がまったくないのであれば、始めから率直にNoと言えば済むことなのだから。

唯一的に結論が引き出され、効率よく意味の伝達が行われるという主張が見落としている、あるいは意図的に無視している、重大な事実、コミュニケーションが人間関係にもとづく相互作用であり、話し手と聞き手が織り成す意味には不確実さが伴うということである。一口で言うならば、人間的要素(人間性)の欠落なのである。この点は、たとえばスパーバーとウィルソンによる次の言葉に見事に凝縮されていると言えよう。

(20) 人間は、効率よく情報処理を行う装置である (Sperber and Wilson 1986:46)

なぜ人間が扱う言葉を観察し、人間のこころを解き明かそうとする企てから、人間という要素を排除し、機械(装置)として見なそうとするのか? 話は巡りめぐって、冒頭で述べた「何かしっくりしないもの」へと帰着するのである。

3 西欧哲学の伝統

ここまでは、さまざまな推論様式を手掛かりに、とりわけ関連性理論において、考慮すべき他の要因、すなわち、人間関係と帰納法的推論を犠牲にして、演繹的推論と効率的な意味の伝達が重要視されている点に注目し、そのいかがわしさ指摘した。しかし、考えてみると、このいかがわしさは今に始まったことではない。生得的に備わっていると仮定される脳内言語(I-言語)についてチョムスキーが次のように語ったときも、私たちは思わず首を傾げたものである。

(21) (I-言語とは) 精神もしくは脳内に実在する要素、すなわち物理的世界の一局面であり、何からの形で物理的に記号化されているものである。

(Chomsky 1986:26、傍点筆者)

一方、私たちが日常的に使っている「日本語」や「英語」はE-言語と呼ばれ、

(22) (E-言語とは) 現実には存在しない、人工物であり、恣意的な性格を帯びている

(Chomsky 1986:26、傍点筆者)

という。

普段私たちが使っている言語が「現実には存在しない」で、脳の中にあると仮定された言語が「実在する要素」とは、一体どういうことなのか。文字や音声の形で、いわば五感を通じて掴み取ることのできるものが実在せず、逆に頭の中を覗いてみたところで出て来そうにもない

知識の塊が実在すると言われても、にわかには（そして思想的背景がなければ永遠に）信じがたいものがある。

そもそも「実在（する）」とはどういうことなのか。

このことを考えるために、まずは野内（2008）と川崎（2005）の指摘に耳を傾けよう。

- (23) a. 日本人、あるいは日本文化には目の前にある現実（世界）を素直に受け容れる傾きがある (野内 2008:93)
- b. (天体の動きに関心を示し想像力を膨らますギリシャ人に対して) 日本人は世界でも珍しいくらい地上のものにしか関心をもたない「超」現実主義的な国民だ (野内 2008:97)
- (24) 実在から「実際に在るもの」という意味を汲み取るのは誤りです。なぜなら、西欧語が秩序立て概念化した世界においては、実在は五感に触れる領域の外はどこかにあるからです。 (川崎 2005:58、傍点筆者)

私たち（少なくとも日本人）は、五感を通して触れることのできる現前の事物や出来事をそのまま受け容れ、それが確かに存在するものと信じて疑わない。しかし、どうやら西欧では事情が異なるらしい。また、たとえば中村元によると、中国を通じて移入されたインド論理学を日本語に翻訳するに際して、これが推理に関する学問（＝抽象性の象徴）としてではなく、相手を予想した弁論技術（＝具体性の象徴）として捉えられたようで、

- (25) 日本人は普遍的な命題を人間関係から切り離して抽象的に考えることを好まなかった (中村元 1962:306-7、傍点筆者)

のだという。ひょっとすると、前節で人間関係にもとづいた発話解釈の必要性を筆者が唱えたのも、中村が指摘した、抽象的に物事を考えたがらない日本人の性向と符合するのかも知れない。いずれにせよ、日本人にとっての「実在」とは、目に見えるもの、耳で聞こえるもの、手で触れるもの、舌で味わえるもの、香りのするもの、そういう具体的なものでしかない。

これに対して、西欧の人たちにとって実在とは、五感に触れる領域の外、すなわち自然を超えたところにある。それを探求する学問が、まさに meta（超えた）+ physica（自然）= metaphysics（超自然学）なのだ。私たちが住んでいる世界で目にしているものは、形の定まらぬ流転状態にある、いわば幻影のようなものであり、真に存在するものは、この世界を超えた彼方にあり、普遍的なものだと考えるのである⁵⁾。

その真の実在は、超自然的原理とも言い換えられるが、プラトンでは「イデア」、アリストテレスでは「形相」、キリスト教神学では「神」、デカルトでは「理性」、ヘーゲルでは「精神」などと呼ばれるものである⁶⁾。

名称はともかくとして、超自然的原理を追求する伝統は、西欧思想（哲学）の世界で脈々と受継がれている。五感を通して掴み取ることのできる個別言語は幻影に過ぎず、どこか目に見えない世界にある I-言語（普遍文法）こそが実在するというチョムスキーの（私たち日本人

にとっては不可解な) 主張も、この西欧思想の文脈に放り込むと何の抵抗もなく理解されよう。ただし、理解できることと、主張を鵜呑みにして、その片棒を担ぐこととは別の話ではある。いずれにせよ、西欧思想にどっぷり浸かったチョムスキーがデカルトに言及するのは、考えてみれば当然のことなのである⁷⁾。

さて、アイデアに代表される超自然的原理であるが、プラトンによると、それは数と同一だという（ブラック1992:139-40）。この点は、川崎（2005）の次の説明がわかりやすい。

(26) アイデアが「(五感に触れない) 数学的図形に類似したもの」であることに加えて、アイデアは端的に数でもあります。例えば、我々は三を見ることはできません。三つのりんごを見ることはできても、三そのものを見ているわけではありません。数の三は五感に捉えられませんから、普遍かつ不変です。従って、数はアイデアが満たすべき条件を備えているのです。（川崎 2005:62、傍点筆者）

数の観念や幾何学的図形の観念は私たちが経験的に獲得するものではない。それは生得的で普遍的なもの、すなわち真の実在（超自然的原理）そのものだ、というわけである。逆に世界を数理的に表わすことに成功すれば、私たちは真の実在を発見したことになる。この点は重要である。偶然性を内包するカオス（混沌）ではなく、必然性に貫かれたコスモス（秩序）の頂点あるアイデア（超自然的原理）は、「AならばBかも知れないし、ひょっとしたらCもDもあり得る」というあやふやな記述ではなく、「AならばB」と明確に法則化されるものなのである。ちなみに、法則（law）は「置かれたもの」、すなわち神（=超自然的原理=絶対者）により置かれたもので、したがって秩序を（唯一的に）生成する合理的なものではない。

ここで前節の推論様式の話に戻ろう。演繹的推論は唯一的に結論が導き出されるのに対して、(広義の) 帰納的推論は、例外を認めるがゆえに、結論の唯一性を保証しない。言い換えると、前者は合理的推論であるが、後者は非合理的推論ということになる。スパーバーとウィルソンが関連性理論の中で演繹的推論=合理的推論に執着する姿勢からは、チョムスキーがそうであったと同様に、彼らもまたアイデアを志向する西欧思想にどっぷり浸かっているという事実が見えてくる⁸⁾。

また、推論を介した発話解釈のプロセスを、労力と報酬のバランスで測る数理関係に還元し、コミュニケーションは最も効率的なやり方で展開するのだという彼らの主張も、これまた合理性を志向している。その背後には「(デカルトのいうように) 理性は神の出張所」(木田2007:123) であり、「神と自然とは余計なものをなにも造りはしない」(野内2008:101) というアリストテレスから引き継がれた考え方が見え隠れしている。

極めつきは「人間機械（装置）論」である。送り手と受け手が共有するコードにもとづき、送り手が意図したメッセージを符号化し（encode）、受け手がそれを解読する（decode）というコミュニケーションの「コード・モデル」を排除したのは、他ならぬスパーバーとウィルソンであった（Sperber and Wilson 1986: 1-9）。実は「コード・モデル」では、送り手が意図し、

受け手が再現するメッセージがまったく同一であることが求められる。しかし、この考え方は、微妙な（あるいは大幅な）ズレが実際のコミュニケーションの現場では起こり得るという私たちの直感に反する。そこで彼らは、いわばメッセージが近似値であれば良しとする、コミュニケーションの「推論モデル」を提案したのである（Sperber and Wilson 1986:9-15）。

一方、データを小さなまとまり（パケット）に分割して一つ一つ送受信（＝符号化し解読）するパケット通信がインターネット上で行われていることから容易に想像できるように、コード・モデルは機械（装置）との親和性が高い。コード・モデルを排除した段階で、スパーバーとウィルソンは「人間機械（装置）論」と一旦縁を切ることが可能だったはずである。それにもかかわらず、どうしてこの考え方にこだわるのだろうか？

それは人間を機械（装置）と見なすことが、私たちの理解を促す単なる言葉の彩（メタファー）ではなく、彼らの考え方の本質だからである。そのことを理解するためには、まずはデカルトにしたがひ、「人間」とは私たち（日本人）がイメージするような五感に頼って生きる生身の人間ではなくて、五感などの感覚器官をいっさい剥ぎ取られた「物体」としての「身体」と、そこに宿る「理性」（＝「精神」）と読み替える必要がある。五感に代表される感覚的諸性質を排除したとき初めて、超自然的原理としての実体、すなわち「物体」と「理性」が残るのだとデカルトは考えるのである（木田2007:122）⁹⁾。

ここで「理性」は、より高次の実在である「神の理性の出張所か派出所のようなもの」（木田2007:125）であるがゆえに、無駄のない秩序、すなわち効率性をもたらす性格を帯びたものでなければならない。他方、五感を剥奪された「物体」としての身体は、理性（魂、精神）の容器すぎない。理性の洞察対象となる物体とは、空間的拮がりと機械的運動から構成されるものと定義されるがゆえに、それは機械（装置）と呼んでも差し支えない。このように考えると、人間は効率のよい情報処理装置であるという主張もまた西欧思想の落とし子と言える。スパーバーとウィルソンは、まさにその思想を生きている研究者なのである。五感を頼りに生きている私たち日本人にとって、この思想は異次元に属する。

4 まとめとして

生成文法であれ、語用論であれ、言語研究に携わっていると、否が応でも西欧の研究者の声に耳を傾けなければならない。とりわけ現代言語学においては、主だった研究の主たる発信地が西欧だからである。しかし、冒頭でも述べたように、言葉では言い表し難いしっくりしないものを感じることもある。その原因をたどってみると、脈々と受継がれている西欧の思想・哲学へと突き当たる。目に見えるものが幻影で、目に見えないものが実体だと言われて、それを鵜呑みできる日本人がどれだけいるだろうか。そうはいうものの、あからさまに疑念を表明すれば、たちまち議論の輪に入れなくなるというジレンマがある。だから、次のような指摘に

内心安堵しながら、研究者としての自制を貫き通している人もいるのだろう。

- (27) 日本人の思惟方法のうち、かなり基本的なものとして目立つのは、生きるために与えられている環境世界ないし客観的諸条件をそのまま肯定してしまうことである。諸現象の存する現象世界をそのまま絶対者と見なし、現象をはなれた境地に絶対者を認めようとする立場を拒否する傾きがある。このような思惟方法にもとづいて成立した思惟形態は、明治以降の哲学者によって「現象即実在論」と呼ばれ、一時、世に喧伝せられたが、その淵源はきわめて古いものである。（中村元 1962:11、傍点筆者）

しかし自制を貫き通すと言うと聞こえはいいが、みずからの心に生じた疑念に対して知って知らぬふりを通すのは「自己欺瞞」以外のなにものでもない。まさに西欧思想の本家本元である哲学研究の世界でも同じことが起こっているようで、次の木田の言葉を重く受け止めたい¹⁰⁾。

- (28) ニーチェ以降の現代欧米の哲学者のものを読んでみると、彼らにしても、こんなもの（＝超自然的原理＝神）を頼りにものを考えるのはおかしいと思っていることに気がつく。というより、彼らはそうした超自然的原理の設定を積極的に批判し解体しようとしているわけなので、そう思ったら、これまでの日本の哲学研究者たちの集団自己欺瞞がおかしくて仕方なくなりました。（木田元 2007:38、傍点筆者）

大いに問題だと思われることは、西欧の理論に共鳴することは、その背後にあるイデオロギーにまで手を染めることになるという認識を多くの研究者が持ち合わせていないのではないかという点である。いや、そのイデオロギーの存在すら知らない可能性もある。あまりにも気軽に、そして唐突に、西欧発の主義、主張、手法を次々と受け容れている人たちの姿を見ていると。

先ほどの引用に続けて木田は、自分自身やっぱりおかしいと口に出して言えるようになったのは「五十を過ぎてから」だったと告白している（木田2007:38）。されば同じ齢になった筆者としても、この際長年の胸の悶えをおろし、同時にみずからへの戒めとしたいという思いをこの小論に込めていることを付言しておく。

*この論文は、大切な恩人であり、尊敬する先輩であり、また楽しい同僚であった河合忠仁先生の御霊に捧げます。

註

- 1) たとえば、『「いき」の構造』などの著作で知られる九鬼周造は、8年におよぶヨーロッパへの留学を通じて西欧哲学の伝統を体得した③に該当する稀なケースと言える。彼はその世界観を妄信するのではなく、西洋と東洋のせめぎあいの中から「いき」を分析し、「偶然性」を論じた。興味深いのは、「西洋哲学の理路の破綻を導き出す」企てにおいて、結局のところ、「いき」の分析では「武士道の超俗的理想主義に走り」、「偶然性」の議論では「形而上的絶対へと加速度的に高揚していった」と言われる（引用は野内2008:144, 155-6）点である。はからずも、（本論で後に触れることに

- なる) 形而上学的 (=超自然的) 絶対者を要請する西洋の世界観を露呈してしまったのである。
- 2) したがって、アブダクションと演繹法は似て非なるものである。このような不適切な推論は、後件肯定の誤謬 (the fallacy of affirming the consequent) と呼ばれる。
 - 3) 一般的な演繹法 (三段論法) では、主語の同一性 (前提1の主語に前提2の主語が包摂される) にもとづいて論理が展開する。前提1: すべての処女は聖母マリアを憧れる、前提2: 彼女は処女である、結論: 彼女は聖母マリアを憧れる。これによく似ているが、述語の同一性 (前提1の述語「処女である」=前提2の述語「処女である」) にもとづいて「論理」が展開される古論理 (パレオロジック) がある。すなわち、前提1: 私は処女である、前提2: 聖母マリアは処女である、結論: 私は聖母マリアである。もちろん西欧論理学の枠組みにおいて、これは「非論理的」思考 (私≠聖母マリア) であるが、見方を変えると「彼女は私の太陽だ」(彼女≠私の太陽) のようなメタファー生成の原動力ともなり得る「論理」でもある。無意識のうちに私たちに縛っている西欧思想を意識のレベルに引きずりだすこと (そして願わくは、これと対峙する思考法の存在を示すこと) を意図している本論と、この論理 (思考法) が決して無縁ではないように思われることをここでは述べておきたい。なお、古論理 (パレオロジック) については、実に多くの研究者が注目していることも付言しておく。木村敏 (1973:140)、丸山圭三郎 (1987:140)、中村雄二郎 (2001:86-94) を参照のこと。また、中沢新一 (2004) でも、名称こそ異なるものの、複論理 (バイロジック) という呼び名で、同様の思考法が主要な話題となっている。
 - 4) 推意の取消し可能性については、Levinson (1983)、Thomas (1995)、山本 (2002) を参照のこと。
 - 5) ブラック (1992:143)、および野内 (2008:41) を参照のこと。
 - 6) 木田 (2007:35)、野内 (2008:39) を参照のこと。
 - 7) チョムスキーの著作はもちろんのこと、彼の人となりについても網羅的な記述のある『チョムスキー小事典』の「記号論」の項で、チョムスキーと西欧思想の深いつながりについての解説がある (今井1986:238-40)。しかし率直なところ、その記述はわかりにくい。「(チョムスキーの理論は〈言語記号論〉と読み取ることができ、) 言葉を実在の表象ないしは代行・再現物とみなすものであって、この立場をとる記号論者は、ア・プリオリとしてロゴスの現前を疑うべからざるものとして措定する」という解説からは、個別言語 (ロゴス) が幻影どころか、真の存在 (現前) であるかのようにも受け止められる。もちろん、そうではないのだが、「実在」という言葉の意味も含めて、この解説を正しく理解するためには、結局チョムスキーの背景にある西欧思想をきちんと押さえていなければならない。やはり言語学の世界にまともに入る大前提は、西洋哲学の知識だと言える。
- ついでに言うならば、「神は死せり」の言葉で知られるニーチェは、プラトンから脈々と引継がれてきた超自然的原理 (プラトン) =絶対者=神 (キリスト教的観念論) は、もともと存在しない虚構であって、西欧文化がありもしない価値観の上に築かれた、いわば砂上の楼閣であることを批判的に述べたのだと言われる (木田2007:181-2、また「高等詐欺」というニーチェの言葉を引用する野内 (2008:41) も参照のこと)。しかし、小事典には「ニーチェが「神は死んだ」と言った神はさしあたりキリスト教の神ではあっても、その内実は「世俗化されたプラトン主義」であり、これこそ形而上学的諸価値のシンボルに他ならなかった」(p.240) とある。西欧思想のまさに頂点に神がいることを説明するために、その伝統を批判した側にいるニーチェを、なぜか何の説明もなく引き合いに出している。実に不可解である。
- 8) ちなみに、唯一的結論を導き出す論理は「単調論理」(monotonic logic) と呼ばれる。他方、アブダクションやデフォルト推論のように一つの結論に収斂する確約がないものは「非単調論理」(non-monotonic logic) と呼ばれる。秩序を生成するアイデアの追求に、二つ以上の結論を孕んだ非単

調的論理は不都合なのだと言い換えることも可能である。

- 9) デカルトにあっては、「理性」と「物体」に実体があるが、身体（＝「物体」）がなくても存在しうる「理性」が重要である（木田2007:123）。何物かが「物体」として存在しうるか否かを決定するのは、あくまでも「理性」だから（木田2000:149-50）。
- 10) 知って知らぬふり、見て見ぬふりをするのは、日本人の本質であるとの指摘もある。長谷川三千代は、このいわば「無視の構造」を「漢意（からごころ）」と呼び、それは「単純な外国崇拝ではない。それを特徴づけてゐるのは、自分が知らず知らずの内に外国崇拝に陥ってゐるという事実、頑として気付かうとしない、その盲目ぶりである」という（長谷川1986:53）。我が意を得たり、とも言える長谷川の考え方に目を向けてくれたのは、本論で何度か引用した川崎（2005）である。科学者である川崎の議論は実に示唆的で、本稿を書く大きなきっかけとなったことをここに記しておきたい。

参考文献

- Chomsky, N. (1986). *Knowledge of Language: Its Nature, Origin, and Use*. New York: Praeger.
- Ginsberg, M. L. (ed.) (1987). *Readings in Nonmonotonic Reasoning*. Los Altos, California: Morgan Kaufmann Publishers.
- Levinson, S. C. (1983). *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Levinson, S. C. (2000). *Presumptive Meanings: The Theory of Generalized Conversational Implicature*. Cambridge, Mass: The MIT Press.
- Sperber, D. and D. Wilson (1986/95). *Relevance: Communication and Cognition*. Oxford: Basil Blackwell.
- Thomas, J. (1995). *Meaning in Interaction: An Introduction to Pragmatics*. New York: Longman.
- Wilson, D. and D. Sperber (1986). "Inference and implicature," in Travis, C. (ed.) *Meaning and Interpretation*. Oxford: Basil Blackwell. 45-75.
- Wilson, D. and D. Sperber (1991). "An outline of relevance theory," in Konishi T. and K. Sugayama (eds.) *Current Approaches to English Linguistics*. Tokyo: Eihosha. 120-150.
- 今井邦彦（編）（1986）. チョムスキー小事典. 東京：大修館.
- 川崎 謙（2005）. 神と自然の科学史. 東京：講談社.
- 木田 元（2000）. 反哲学史.（講談社学術文庫）東京：講談社.
- 木田 元（2007）. 反哲学入門. 東京：新潮社.
- 木村 敏（1973）. 異常の構造.（講談社現代新書）東京：講談社
- 中沢新一（2004）. 対称性人類学.（講談社選書メチエ）東京：講談社.
- 中村 元（1962）. 東洋人の思惟方法3（中村元選集第3巻）. 東京：春秋社.
- 中村雄二郎（2001）. 西田幾多郎 I. 東京：岩波書店.
- 野内良三（2008）. 偶然を生きる思想—「日本の美」と「西洋の理」—. 東京：日本放送出版協会.
- 長谷川三千代（1986）. からごころ：日本精神の逆説.（中公叢書）東京：中央公論社.
- ブラック. R. S.（内山勝利訳）（1992）. プラトン入門. 東京：岩波書店.
- 丸山圭三郎（1987）. 言葉と無意識.（講談社現代新書）東京：講談社.
- 山本 英一（2002）. 「順序づけ」と「なぞり」の意味論・語用論. 大阪：関西大学出版部.
- 米盛 祐二（2007）. アブダクション——仮説と発見の論理. 東京：勁草書房.